

私の仕事

吉川 猛

あの、私は私仕事は何なのか、ずっと探していました。私がひとりです。これからずっと、あきずにつづけていける仕事のことです。

これはずつとむかし学校の先生にも
「楽しんでやれることを何かひとつ見つけましょう。でもそれは五目並べとか黒ひげ危機一髪みたいなゲームとはちがう、何かほかのことのほうがいい。それをするとまわりの誰かが喜んでくれること、できれば自分の手で何かひとつのものを作れるようにがんばりましょう」

卒業式の日にも言われたことです。

今では毎日通つてるわかたけ作業所で

「ゆっくりでいいからね。はじめからうまくできる人なんていません。お手本を見ながら一つ一つていねいに。競争ではないから他の人より遅くても全然オッケイ。まちがいはなく仕上げるのが一番。その次はキヨロキヨロしたりウロウロしたりせず集中してつづけられるのが二番」

どの作業でも職員さんはみんなの机の間を見て回りながらこういいます。

わかたけ作業所にはいろんな作業があつて、なかまは一人一人思い思いの好きな仕事を選べるのです。私も職員さんにさそわれて何個かためしてみました。けっきよく三本ネジしかうまくできません。

三本ネジの作業は小さなビニール袋にネジを三本入れ、その前のほうにワッシャーという小さなドーナツ形の輪っかをこれも三枚入れる作業です。

ここで注意しなくてはいけないのは、三本のネジのうちまん中のネジだけは向きを逆さに入れて入れることです。

私はよくまん中のネジもあとの二本と同じ向きに入れてしまいます。職員さんが作ってくれた見本の絵の上に、ネジの頭の大きくなつたほうをそろえてのせ、そのまま袋に入れてははずなのに、いつのまにかクルツとひっくり返っているのです。

だから職員さんや上手な子に直してもらうことがよくあります。けれど、たまにひとりでも何個もつづけて間違わずにできて、ネジを入れた袋を入れる用のカゴがいっぱいになると

「やあ藤井君、うまくなつたなあ。その感じで二カゴめもいけるぞ」

いろんな人にいわれますし、帰りの夕礼でも「きょうのニュース」としてとりあげてくれます。

そんな時は私もニヤニヤとなって耳たぶが熱くなり、両手で顔を隠したりします。

けれど、それでも、三本ネジの作業は、私の仕事ではないのです。朝の九時に来てずっと手を動かしていたらいつのまにか昼ご飯、といったことでなく、気がついたらCDプレーヤーの前に立って、歌に合わせて歌ってたりします。

それはまだいいほうで、外に出て車が通るのを見たり、ずっと高いところの線路を電車がやってくるのを待っています、それはルール違反なのできつと怒られます。

ところが、なんと、きょう、月曜日、急に私の仕事が見つかったのです！これはほんとにびっくりしました。少し長くなりませんが、私の話はいつも長いといつてなかまたちからよく注意をうけるのですが、今から話す話から思いがけなく見つかったのです。

おとといの土曜日は前からの約束で朝からヘルパーさんと外に出かけました。イオンモールでハンバーグを食べ、広場のベンチに座って水筒のお茶を飲みました。そのあととなりの広い公園へ行行って、花を見たりすべり台をすべってる子供を見たりしてグルグル散歩しました。

ホームに帰ってくると世話人さんの久我さんがドアを開けてくれました。お風呂に入り晩ご飯を食べたあと、同じホームのなかまはじぶんたちの部屋にもどっていきましましたので、食堂は私と久我さんの二人だけです。

急にテレビのボリュウムが上がったみたいに大きいきこえます。男のアナウンサーが私ひとりに向かって話しかけてくるみたいで、グツと背中をのばしウンウンうなずきながら聞き耳を立てます。

じつとそうしているとやがて肩をたく人がいます。ハツとうしろを向くと、久我さんが立っていました。テレビに夢中のあまり、久我さんがお皿を洗う水道の音がやんだことも、久我さんが何度も私の名まえを呼んでいたことも吹っとんでいたので、とて

もやせた、あまり笑わないのでちよつとこわい感じのするおばさんですが、

「藤井君、ちよつと早いけど誕生日おめでとう。来週の火曜日まで、久我さんの当番の日はもうないから、今日言っとくね。いくつになるの？」

いつものようにギョロつとした目をグツといっぱいに開いています。

数をかぞえるのは私のいちばん苦手なことなのです。ウーンと首をひねりながら指を折り曲げたあと、

「八才」

と答えました。

「ハハハハと久しぶりに笑った久我さんが、
「ずいぶんサバを読んだねえ。でも久我さんの調べたところ、実
さいには四四才だと思ふよ。だから作業所できかれたらきちんと
答えるんだよ。四、十、四才になりましたって」

「ああそれからといって、久我さんは世話人さん専用の小さな部
屋に入って、また出てきました。」

「はいこれといって、手にもつていた四角いものを私に渡しまし
た。外側の紙をはがすと小さな本が出てきました。『アンデルセ
ン名作集』と書いてあります。」

「わからない言葉やむずかしい漢字があつたら、誰にでもいいか
らききなさい。とにかくまず一つだけ、お話を最後まで読んで、
よかつたら感想をきかせてちょうだい」

「一枚二枚とページをめくりながら、ありがたうをいいながら、
ほんとうは『さあ困ったなあ』と目のまえがまっ暗でよく字が見
えません。」

「さし絵もいっぱいだね」

「久我さんのいうとおりきれいな色の絵がページをめくるごとに
パツと飛びこんできます。漢字にもほとんどフリガナが付いてい
て、

「これなら安心」

「とまた久我さんはいいますが、少しも安心じゃない。」

「たしかに愛光支援学校ではひらがな・カタカナカードはもちろ
ん、漢字カード、練習プリントもやりました。中学部では絵本の
スライドショーも見ました。高等部に行つてからは文字を目で追
いながらの読み聞かせや、たまに図書室での読書の時間もありま
した。」

「それは私にとってははつらくて長い時間でした。読み聞かせはま
だいいほうですが、じぶんで文字を読むとなると、とてもしんど
いのです。文字の一つ一つが固いカラをかぶつていて、読んでい
くうちにどんどん頭のなかにたまつていつてだんだんイライラし
てきます。それはちょうど毎月すみれ病院でもらう丸いクスリを
冷たい水で何個も飲んだ時いつまでも胸にのこつて苦しくなるの
にそっくりです。」

「そこで今朝作業所に来るとさつそく、いちばん仲のいい職員さ
んの福谷さんに相談してみました。福谷さんは作業所のなかでい
ちばん若い二十七才の、カツコのいい男の人です。」

「ウーン、僕も本を読むのは苦手だからエラそうなことはいえな
いなあ。学生時代は作文なんか超キライだったし……」

しばらく腕を組んでなやんでいました。そのうちポンと手をたたき、

「ああそうだ、高校の時にね、国語の先生にいわれたのはね、文章なら何でもいい、小説でもマンガのセリフでも、チラシの広告でもいいから、じぶんが気に入った文章をノートにそのまま書き写しなさいって。つづけていくうちにだんだん読むのも書くのも好きになるよってね」

ちよつと待ってといて福谷さんは二階の事務所にトントンかけ上がっていきました。またかけ足でもどつてくると、

「今荒木田さんにも了解を得たから大丈夫」

荒木田さんというのはわかたけ作業所の管理者さんのことです。

その名前をきいて私はドキツとしました。管理者さんは背が高く、鼻も高い、ねずみ色のふさふさした髪の毛の、年取った俳優さんみたいになりっぱな感じのおじさんです。着ている服もほかの職員さんみたいにジャージやジーパンでなく、パリツとした洋服にネクタイをしています。そのせいか、いつも管理者さんをみると体がカチカチになって返事もうまくできません。

そんな私の気持ちとは関係なく、そのとき階段がトントン鳴って、管理者さんが下りてきました。

「藤井君、きいたよ。ずっと続けられたらいいね。」

ここは作業所だけど、作業でなくても自分が楽しいと思えることをするのが何より大切だからね。わかたけのモットーは利用者の笑顔が第一」

私はいつも言われてるように管理者さんの目を見てハイ、ハイと答えるようにがんばるのですが、すぐに下を向いてしまいます。

たしかに管理者さんは笑顔で声をかけてくれてるのですが、その笑顔はすぐに終わってしまいそうで、私のせいで終わってしまつたら大変なことだと、そのことだけでドキドキするのです。

今もそのとおり、いったん話が終わると笑顔のほうもはいおしまいという風にパタンと閉じてしまい、戸を開けて外の灰皿へ行つてしまいました。

でもそれも私がなれていないだけなのかもしれません。管理者さんは作業所に来ない日のほうが多いですし、来ても二階でずつとお仕事しているか、すぐにまた出ていってしまいます。「会議」や「打合せ」で忙しいからしょうがないよと職員さんがみんなそういうのですから、しょうがないのです。

ハイこの話はこれでおしまい、続きまして福谷さんが、

「はいどうぞ。これは使っていないものだから」

ポンと私の手に何かのせました。

「そうだな、藤井さんの場合は手を動かすのが好きみたいだから、もらったその本のなかでまず気に入った文章をみつける、それがみつかったらこのノートに書き写してみるっていうのはどうだろう」

渡されたのは表紙にウサギが写ってる、学校で使ってたのとおなじ大きさのノートです。

「これはうすいノートだから、とりあえずぜんぶ埋まるまで書き写したい文を書き写しましょう」

「という事で約束しました。」

今は作業の時間だけれど、とくべつにすぐとりかかってよいというおゆるしをもらい、なかまのみんなにも朝十時の朝礼で伝えてもらえたので、堂々と作業台にノートと本を広げてはじめました。

けれど『アンデルセン名作集』を開いて一ページ読んだあと、アツとつまずいてしまったのです。

「気に入った文を書き取って」と福谷さんはいいました。

でも、まだ一ページ読んだだけです。たぶん、この先何ページ読んだって、好きな文も、言葉も、文字も、一つも見つかりにないのです。

紙の上でできたいろんな形のシミを一個一個はしのほうから目でたしかめてるだけなのです。

しようがないので、さいしょから一文字一文字そのままノートに写していくことにしました。エンピツで書いてるから、もしも気に入らないところがあれば、あとで消しゴムで消せばいいわけです。

字を書くのなんて、なにしろ、毎月さいごの日にお給料をもらう時じぶんの名まえを書くのと、日直当番のとき出席簿をつけるときだけですが、これはみんなの名まえの横に○か×を書きこむだけなので、文字を書くのはあらためて大変です。

本とノートの間で何度も目を行ったり来たりさせて、文字の線を一本一本、それもそおつと目玉を動かさなくてはいけない、あわててするとポトツと落としてしまいです。

いちばんよく似てるのは金魚すくいです。丸い線やまっすぐな線を、ゆっくりりていねいにすくい取らなければ、とちゅうで逃げてもうどこへ行ったかわからないのです。

「どう、順調にいくてる？」

うしろから福谷さんのぞきこんでいます。

サツと隠したいのですが、せっかくノートをもらったことだし、それも悪いので、そのまま見せておきます。

福谷さんは指で私が書いた字をこすりながら、

「わあ、お手本そっくりの字だなあ。コピーしたのかと思ったよ」
時間をかけてゆっくりと写しに写してあるから当たり前なので

す。
でもそういわれたので、じぶんでも背すじをのばしてじぶんの書いた字をながめてみました。

字の大きさはバラバラですが、たしかに本の字そっくりの字がぎっしり並んでいました。私も福谷さんをマネて人さし指で一つ一つ押さえながらうっとり、いつまでも見つめていたい気分です。

そのとき、とつぜん、天井からキラキラとカンバンが下りてきて、そこに太い大きな文字で、

「これが私の仕事だ！」

ネオンサインの文字が光ってるのがはっきり見える気がしました。

だれかにグラグラ頭をゆさぶられたみたい、しばらくぼうっとしてしまいました。

だから、

「さあ、そろそろお昼だからみんな片付けようか」

職員さんの声も、ガヤガヤしゃべりながらイスを立つなかまたちの声もずっと遠くにしかきこえませんでした。

あれからのくらくらしたたのでしよう。たしかあの時は後見人さんに買ってもらったおさるの絵がついたぶ厚いトレーナーを着ていて、今はイルカの絵がついた半そでのTシャツを着てますから、もうだいたいたははずです。

仕事のほうもだんだんうまくなって『アンデルセン名作集』のほうはもう何回写したかわかりません。私のクセで左手で本のカドをさわりながら仕事をすすめるので、本のカドは二つともまるくなってしまうました。

ノートはさいしょにもらったものをいちばん下にして、ホームのじぶんの部屋のすみにずっしり積まれて高いタワーになっていきます。

たしかに工賃になる作業ではないのでお給料は出ませんが、そんなことはたいしたことではありません。たしかに毎週金曜日に世話人とコンビニでお菓子やジュース、フィッシュソーセージなども前よりちよつとがまんしなくてはなりません。それでも大まんぞくなのです。

ほんとに朝九時からはじめたら、タイムマシンに乗ったみたいにもう十一時半、弁当を食べてなかまとぬり絵をしたりしりとりをしたりして、一時のそうじがおわったらまた開始、すぐに「もう四時ですよ」

耳もとで声がして、時計をみたら帰る時間なのです。

だからホームに帰ってからも、むかしは八時の消灯まで食堂でテレビをみていたのに、今は食べおわったら歯をみがいてすぐじぶんの部屋、小さい机の足をひらいてその上で仕事をはじめます。

「すごいなあ、よくあきないなあ、オレにはとてもムリ」

となり部屋の板橋君もたまに部屋にきて素晴らしいですが、私も板橋君のようにふつうの会社ではたらくなんてできないのだからおたがいさまです。

ですから、ホームの管理者さんや世話人さんに、ああ久我さん
はもういないからかわりに入ってきた木村さんのことですが

「つぎの新しい本買ってあげるよ」

といわれても、はつきりことわっています。

これはえんりよとはぜんぜんちがって、『アンデルセン名作集』
をまだまだ書きたいからなのです。まだまだぜんぜん書きうつせ
てないことがあるからです。たとえばこんな感じですよ。

それを見たアヒルの子はミルクつぼの中へとびこんでしまいま
した。おかげでミルクが部屋じゅうにとび散りました。

おかみさんは大声でわめき立てて、火ばしでアヒルの子をぶと
うとしました。ところがありがたいことに戸があけはなしになっ
ていました。

それを見たアヒルの子はいま降ったばかりの雪の中へとびこみ
ました。おかげで雪が部屋じゅうにとび散りました。

おかみさんは大声でわめき立てて、火ばしでアヒルの子をぶと
うとしました。ところがありがたいことに戸があけはなしになっ
ていました。

それを見たアヒルの子はミルクつぼの中へとびこんでしまいま
した。おかげでミルクが部屋じゅうにとび散りました。

おかみさんは大声でわめき立てて火ばしでアヒルの子をぶと
うとしました。ところがありがたいことに戸があけはなしになっ
ていました。

それを見たアヒルの子はいま降ったばかりの雪の中へとびこみ
ました。おかげで雪が部屋じゅうにとび散りました。

おかみさんは大声でわめき立てて、火ばしでアヒルの子を

というふうにならずとつづけられるのです。これは私の発明で、
文章を写していて、同じ言葉がでてきたら、前にでてきたところ
にもどってもう一度書き写すというやり方です。

それからこんなもあります。

すると、どうでしょう。さかなのしっぽはいつのまにか消えてしまつて、かわいらしい人間の娘しか持つていないような、世にも美しい、小さな白い足が生えているではありませんか。

そこで人魚姫はすっかり罪をざんげしました。すると首切り役人は赤いくつをはいた人魚姫の足を切つてしまいました。でもくつは小さな足といつしよに畑をこえて奥ぶかい森のなかへ踊つていつてしまいました。

子どもたちはほつとして小さいもみの木のそばに腰をおろしていました。そして、

「やあ、ずいぶんかわいい人間の足だなあ」といいあいました。

これは書き写す手を休めて本を持ち、それから目をつぶつてパラパラめくりまわす。

「ストップ！」

めくつていた手を止めると、開いたページの上に右手をのせます。そのあととちよつと大変ですが、さっきまで写していた文のきれはしをみて、だいたいそれに似た言葉を、今開いてるページの中からさがしていくわけです。なかつたらもう一度目をつぶつてやりなおしです。そして似てるなあ気づいたら、そこからつなげていくのです。

三つ目の発明は一つのお話をさいごのほうからはじめのほうへと反対の向きに、それも間をとぼして写していくやり方です。これも字の形のつながり方をじっくりみて、いい感じだなあと思えなければつなげられないので、なかなかむずかしいのです。こんな感じですよ。

お母さんは寝ているお父さんの上に、身をかがめました。お父さんは、お母さんのま心こめた暖かいキスで、目をさました。ふたりは、心を開いて、胸にしまつていることを話し合いました。お母さんは、妻として、強くやさしくなっていました。

「おまえはいつたいたいで、それほどの力とそれほどの心のなぐさめを、急にもらつてきたんだね？」

お母さんは、お父さんにもう一度キスをして、こう言いました。「神様からいただきました。お墓の中の、坊やおかげで」

みると、目の前に、死んだはずの坊やが立っているではありませんか。

お父さんは深くうなだれました。

このような発明のおかげで、本一冊とノートがあるだけで、いつまでもいつまでも仕事ができるようになりました。新しい本をもらうより、こっちのほうはずっと私がさがしていた仕事、という気がするのです。

こうして毎日、朝作業所に来てから夜部屋の電気を消すまで、ずっと字を見て字を書いているのですから、頭のなかは字のことでいっぱいです。

フトンに入って目をつぶっても、まっ暗ななかに白っぽく、ひらがなやカタカナや漢字がいつかテレビで見た海のなかの生きものみたいにぶつかったりはなれたりしながら、ゆらゆら動いています。

それだから私が寝てしまったあとも、夢のなかでは、夢は毎日みるのですがいままではホームや作業所のなかま、職員さんばかり出てきたのに、いまはもう人はあんまり出てこなくて、私がひとりで道を歩いていると、その日はゴミの日みたいで道ばたに大きなゴミ袋がおいてあって、なかにはグツタリした感じの文字がいっぱいあって捨ててありました。

もっと歩いていくと、いつのまにか夕方になったようで、きれいなオレンジ色の空を細長い形の文字がたくさん集まって、バタバタ折れ曲がりながらいつせいに飛んでいくのを見かけました。

道はいつもきまってせまい道で、向こうから私と同じか私より背の高い字が何かしゃべったり笑ったりしながらやつてくるので、体を斜めにしなくてはなりません。

ときどきものすごく大きな、見たこともないむずかしい漢字がうなり声をあげながらゴロゴロころがってきた時はあわててカベに背中をあててよけたりします。

夜になるとどの家の窓にも文字の影がうつって、楽しそうに何かしゃべっています。

それが何をいつているのか聞きとろうとして、それがわかったらこれから全部のことがともうまくいく気がして必死に耳に手を当てるのですが、わかりそうなどころでスーッと目がさめてしまうのです。

今日も机のうえに本とノート、えんぴつと消しゴム、えんぴつ削りを用意して、いま長い針が十一のところに来ていますから、仕事にとりかかるのはもうすぐです。

月曜日に職員さん二人で、
「寒くなつたなあ。そろそろ……」

とって倉庫からガスストーブを運んできました。

私としてはまだまだ半そでシャツで平気ですが、ホームの世話人さんから、

「そろそろ長そでにしないかい」

といわれたので、またトレーナーを着ています。ですからこの仕事をつづけて、もうだいぶたつたということです。

面談のときにはいつも担当の職員さんに、

「集中力を身につけよう」

がいちばんの目標だったので、この仕事がみつかってよかったなあと毎日ホッとします。

これも面談のとき、この仕事をつづけていて、

「何か気持ちや考えることで、前とここが変わったなあと思えることはある？」

ときかれました。

そのときはうくと首をひねって、うまく答えられませんでした。気が持ちというか、目の感じ、目に見えているまわりのようすがちよつと前とは変わってきたのです。

フトンに入ってから見る夢のなかで、なかまや職員さんでなく、文字が主役になったのはまだつづいています。それだけでなく、さいきんは朝九時から書きうつしはじめて、

「そろそろ片づけ」

ハットとノートから目をはなし前を見ると、あちこちに黒い虫がポツポツ飛んでいる、と思ったのはよく見ると、さつきまで写していた字が空気のなかでピクピクうごいているのです。

びっくりして手をのばすと、文字は指でさわれそうにじっとしています。ガラガラした感じツルツルした感じも何もなく、パツと手のひらでつかんでもただ空っぽの手をにぎってるだけなのです。

それは私の目が悪くなったただけかもしれません。いつもノートすれすれに顔をくつつけていると、

「藤井君、背すじをピンとしましょう。姿勢も目も悪くなるよ」

よくいわれるから、そう思うのです。これはちよつとむずかしい話で、伝えるのに時間がかかるのですが……。

もともと私は耳はとてもいいのです。これはじぶんでそうじまかでもいちばんいってくれるのは桐山さんです。

桐山さんは送迎車の運転手さんで、あの、私は毎日バスで作業所まで通ってるのですが、送迎車で通ってるなかまもいるのです。

送迎車はいつも私が着いた少しあとに到着します。外にある駐車場に車が止まると、桐山さんから電話がかかって、職員さんが電話をとって、

「はい、すぐ行きます」

といって外にむかえに行くのですが、私はその前にわかっていません。電話が鳴る前にわかるのです。

駐車場はちよつとはなれたところですが、私には桐山さんの車がやって来て、エンジンの音が同じ場所で鳴って、それから止まるのがきこえます。職員さんはだれもきこえません。

ですからさいしよはエンジンがきこえると、アツきた！ とわかってドアを開けて出ていこうとすると、

「ちよつと藤井さん、どこ行くの？」

とかならず注意されました。

今はみんな知っているから、電話が鳴るまえにとび出しても、「アツ、送迎車が来たな」

とわかっていきます。だから桐山さんも電話しなくなりました。

外にむかえに行くのと桐山さんは車をおりて、

「よお社長、けさも元気だなあ」

といってくれます。

そして決まりきったことなのに、

「藤井君はほんとに耳がいいなあ」

といってくれる桐山さんはいい人です。

なかまの中には桐山さんがこわいという子もいますし、とくに送迎車で通ってる子はこわいという子が多いです。これはうわさですが、送迎者の中できのうのテレビの話とかでワイワイしゃべっていると、

「うるさい！ 運転のジャマだ！ お前ら全員交通事故で死にたいのか！」

とどなられたといます。

または目がよく見えない朝田君はたまにキゲンが悪く送迎車に乗りたがらないことがあると、

「早くしろ！」

といってお尻をけるとかいつてましたが、うわさはうわさなので私は信じなくていいのです。

たしかにベレー帽とかいう帽子をかぶって、色がついて目がみえないメガネをして、首にキラキラしたクサリを巻き指輪を何個もはめ、たまに大きい声を出すのでちよつとこわい感じですが、たまにみんなにせんべいや果物を配ってくれるのだから、やっばりいいおじさんです。

このように私はむかしから耳がいいのですが、これにもさいきんになってちよつと変わったことがあります。きっかけは先週の木曜日のことです。

先週の木曜日いつもどおりみんなが作業していると、一〇時ころ急に職員さんが、「みなさん聞いてください。みなさんが毎日お仕事をがんばってくれているおかげで、業者さんとの約束の日にきちんと納品が間に合っています。」

そこで今日の仕事はもう終わり！ 午後からはカラオケボックスに行きまうす！

それはほんとにとつぜんのこと、カラオケ大会はいつもとつぜんいわれるのでみんな大さわぎ、いつものお昼前よりずっとやかましくうるさくなるのですが、机の上の道具や部品はみんなサッソと一気に片づけてしまい、昼ごはんの準備はいつもよりぜんぜん早いのです。

弁当を食べおわると、班ごとに分かれて歩いてカラオケボックスまで、歩くのが苦手な人は車で行きます。私は歩いて行きました。

とちゅうの家のまえの犬小屋で大きな犬がよく寝ているのですが、その日はいませんでした。

エレベーターに乗って4のボタンをおすと、ドアが開いて到着です。

職員さんに一人一人名前をよばれ、さつきより小さな班に分かれて部屋に入り、ジュースをもらいに行くと、さつそくカラオケ開始です。

私の部屋は五人部屋で職員さん一人となかま四人です。私は歌いませんし、もう一人の金子さんもあまり歌わないので、あとの二人はよく歌います。どの部屋もそういう組み合わせです。

岡野君がマイクをもって立ちました。もうとつくに歌は決まっています、じぶんでデンモクを使って予約したのです。岡野君はほんとに歌がうまく、いつもうっとり聞いてしまいます。

けれどそのときは歌声がきこえてすぐ、アツと声を出しておどろいたのです。

岡野君が一つ一つ音をゆつくりのぼして歌いはじめると、天井から、黄色っぽい空気のなかを雪みたいポツリポツリ、ひらがなが降ってきたのです。

「きみがいたなつはとおいゆめのなか
そらにきえてつたうちあげはなび」

あわててまわりを見回しても、みんなは手拍子やタンバリンをたたいて、じつとカラオケの画面を見ているのです。

みんなは画面の下のほうに出てくる、だんだん色が変わっていく歌詞を見ているのです。けれど私はいつもあの歌詞は色が変わるのが早すぎて追いつけないから、見ないことにしています。だから、つまり、いま降ってきたひらがなは、私は耳がいいから、耳で聞いたことばがひらがなになってそのまま降ってきたはずです。

それでそのあと急にテンポが早くなって降ってこなくなったのは私の耳が追いつけなかったからでしょう。

このことがあったのは先週の木曜日で、それから毎日、ノートに書き写した言葉だけでなく、耳ではっきりきこえた言葉も文字になって目のまえにうかんだり、落ちてきたりします。

けれどまあ、たまに、

「どこ見てるの？」

ふしぎそうになかまや職員さんにきかれるだけで、とくに困ったことじゃないので、気にしません。

本から写した文字はしばらくたつと目の前からかかって消えるのですが、耳で書いた文字は書き写さないと消えないでどんどんたまっていくので、ノートのさいごのほうのページを使って書き写すことにしました。

さあもう九時をまわったので、そろそろ仕事にとりかかります。

書きとりの前に、けさ来るとちゆう外で書いて道の上でボールみたいにはねていた字を書き写しておきます。私が電車が通るのをまっつて高い線路を見上げていたときにきいた、黄色い帽子をかぶりランドセルをせおった女の子二人の声です。

「きょうはいたね でんしゃばか」

「いたね いたね きょうはいいことあるかな」

「それはもうふるいんだよ でんしゃばかみたら きゆうしよくたべて おなかこわすんだよ」

だんだん耳からきこえてきた言葉が文字になって、空気のなかにフワフワうかんでいることがふえてきました。多いときは作業所の中は床から天井まで文字だらけになって、なかまや職員さんたちの顔がみえないくらいです。

それが消えてしまうように書きつけるのに大いそがしで、アンデルセンを書く時間がとれなくなってきました。ノートのうしろの方から書きはじめた声のメモはどんどん前にせまっていつて、もうすぐアンデルセンにくつつきそうです。

そこで福谷さんにノートをもう一冊もらい、別のノートに書いていくことにしました。

でもそうなると思うのは新しい声のノートのほうばかり、アンデルセンはほったらかしになってきました。

「日記をつけはじめたの？ えらいぞ、いい習慣だ」

「そういわれますが、書かないと文字が消えないのですから、昼ご飯を食べたあとのそうじと同じことです。」

「どんどん寒くなってもう今年も終わりです。今年さいごの日は朝から大そうじで、そのあと弁当を食べておしまいです。私もその日だけはみんなといっしょにそうじしないといけません。そうじ中もみんなの話す声がほとんどはひらがなで、たまに私の知ってるやさしい漢字になって、うかび、それからポトツと床に落ちます。」

「みんなせつせとほうきではいたり、そのあとモップでふいたりしています。文字は素どおりするだけでぜんぜんへっていきません。しょうがないので、急いで弁当を食べたあと、床に落ちた言葉をノートに書きこんでいくと、帰る時間の一時ぎりぎりにや」と片づきました。

「帰る時には玄関の前に職員さんがみんな一列にならんで、今年も一年間ありがとう。よいお年を！」

「とってハイタッチしてくれました。列のいちばんうしろには管理者さんもいたのでびっくりしました。その日が十二月になって初めて管理者さんの顔を見た日だからです。」

「管理者さんはもとも来ない日が多く、来てもずっと二階でお仕事してるか、すぐに出かけてしまうので来てるかどうかわからない日が多いです。いろんな「会議」とか「打合せ」で忙しいのでしようがないです。」

「これは前にもお話したかもしれませんが。だいたい私は同じことを何度もいうクセがあつて、そのせいで話も長くなってしまいます。これはみんなにいわれてやつと気がつくことで、じぶんでは言い忘れてはいけないと真剣なのです。」

「けれどもみんなにイヤがられるのもイヤなので、一月一日の朝ホームでお雑煮を食べる前に「今年の目標」を一人ずつ発表する時、この点を直すことを私の目標として言いたいと思います。」

「お正月休みはとくに行くところもないので、ずっとホームにいました。ホームのなかまはみんな家に帰り、世話人さんもお正月休みで、ホームの職員さんの小西さんがかわりにとまっていたので、小西さんと二人でほとんどテレビを見ていました。」

「テレビは見ていただけで、ノートに写すことはしませんでした。テレビもカラオケといっしょで、早すぎてなかなか文字がうかん

でこないのです。それにテレビも下のほうにちゃんと文字が出てくるので、書かなくてもいいかと思えます。

アンデルセンも少し写しましたが、もう前ほど集中できるほどじゃなく、日記のほうにすっかりきょうみがうつっていました。

ですから一月四日の朝が来ると、いよいよ待ちに待った新年さいしよの通所日でした。

きまりどおり朝八時にホームを出る約束でしたが、とくべつにおゆるしをもらい、もっと早く出発しました。わかたけ作業所に着くとガラッとドアを開け、

「あけましておめでとございます！」

アレッと首をひねりました。朝来たらいつも必ずいる福谷さんのすがたが見あたりません。そのかわりまだあまり見たことのない女の職員さんが小さな声で、

「ああ、おめでと！」

といて、すぐ二階に行ってしまった。

私は利用者さんで一番のりだったので、あとからすぐに来た遠井君に、

「福谷さんは？」

ときいてみました。

遠井君はエッ？ と口を開けたあと、じーっと考えこんでいました。それから、

「何言ってるの？ 去年さよならしたじゃない」

といて更衣室に行ってしまった。

私もしばらくじーっと考えこんだあと、そうだ！ とピンとひらめきました。

大そうじのあと、弁当を食べたあと、今日でみなさんとはお別れですと言っていたのを思い出しました。何人かの女の子は泣いていたのを思い出しました。日記を書くのに大いそがしのせいですっかり忘れていたのです。

私はリュックからノートを出して、めくりました。あつた！

「みなさんと すごしたひびは ぼくにとつてかけがえのないざいさんであり ほこりです……」

ズラッと書いていました。書くのにいっしょうけんめいのあまり、忘れていたのです。

そのことで朝のうちは手に力が入らず、頭はボーッとみんなの声もあまりきこえなかつたので、アンデルセンを少し書いただけでした。お昼を食べたあとはちよつと元気がでて、また日記をつけるのをがんばりました。

ふと顔を上げると、なかまどうしが二人で大声で何か言い合っています。声が大きすぎて何を言っているのかさっぱりきこえず、文字は一つもうかんできません。

そして岡野君が遠井君のシャツのえりを引っ張り、ゾウみたいな遠井君の体が前にグラツとゆれ、胴体にくらべて細い遠井君の足はよろけたついでに机の足につまみつき、そのままドサツと横にたおれ、はずみで頭が床の上でゴムまりみたいにワンパウンドしました。

女の子の悲鳴がして、私は職員さんをさがしますが見つかりません。すぐにドタドタ階段を下りる足音がして、女の事務員さんが白目をむいて口から泡をふいてる遠井君のうえにしゃがみました。

さいきんではたまにあることなのです。泡までふくのははじめてですが、いままではケンカになれば職員さんがすぐに止めに入っていたのに、福谷さんのあと高木さんもやめ、職員さんはいつも二人か一人、今みたいにだれもいないときもあるのです。

それに去年までは木曜日のお昼は職員さんの手作り料理をいただいていたのに、今年からは木曜も弁当を食べています。

それでも私はケンカしたことはありませんし、手作りごはんがないのはざんねんで弁当はあまりおいしくありませんが、ホームに帰れば世話人さんのごはんはおいしいので、あとはじぶんの仕事をコツコツがんばれば今までどおりうまくいくはずです。

いつものように入り口のドアのくぼみに手をのせ、

「おはようございます！」

いおうとしたら、ドアが開かないのでいえません。

しようがないので雨ふりのとき水たまりをよけて入るウラのほうのドアに行つて手をのせましたが、これも開きません。

またしょうがないので入り口のドアの前にもどつて立つてると、桐山さんの送迎車が近づいて止まる音がしました。

いつものように走つて車まで行き、うしろのドアを開け、助手席のドアを開け、下りてくるなかまたちに、

「おはよう」といいました。

桐山さんが下りてくると、おはようございます、より先に、「今日は作業所はお休みなんでしょうか？」

とききました。

桐山さんはきこえなかったのか、いつもどおり、「よお社長、いつも早いな」

といたしました。桐山さんはだいたいいつもそんな感じですよ。私
が何と言っても、きこえていないのか、いつもおなじ返事がかえ
ってきます。

目が悪いせいかひとりですぐ歩くのがむずかしい朝田君の
手を引いて入り口のほうへ歩いていくと、前を歩いていた桐山さ
んが、

「アレ、どうした？」

ドアを開けようと横にグツグツと押しながら言っています。

「今日はお休みのようですよ」

私はこたえ、桐山さんは大声で、

「オレはきいてない！」

ドアをクツでけると、ポケットからケイタイ電話を出し、電話
をかけました。

ケイタイ電話に向けてどなっている桐山さんのよこで私たち利
用者さんたちは、しまったドアの前で立っていました。

ずいぶんたつて、向こうから職員さんが、まだ新しい人で名前
はおぼえていないのですが走ってきました。

そのメガネの男の人は桐山さんに何度もおじぎすると、ガクガ
ク手をゆらしながらドアの穴にカギをさしました。

私となかまが作業所に入ったあと、作業所のそとで桐山さん
は大きな声で、メガネの職員さんは小さな声でしゃべっています。
た。私はいそいでノートとえんぴつを出し、作業所のそとからス
ーツとドアをぬけて床の上をはずんでくる字を書きました。

そのうち桐山さんの声も小さくなっていました。耳のよい私
にはぜんぶの音が丸っこい文字になって私の足もとまでころがっ
てきました。「職員やめる」や「管理者しかく」や「ぜいきん
どろぼう」などの文字を書きとりました。いちばん多かったのは

「あのばか」や「ふざけやがって」の文字は何度も書きました。

そのあとメガネの職員さんはなかに入り私たちといいましたが、
桐山さんは外でまただれかに電話しました。

そのあと仕事に集中したのでどれくらいだったかわかりませ
ん。ふと耳に桐山さんの声がきこえました。とっくに帰ったと思
っていたのに、ドアのそとからきこえるのです。

ずっときいてると声はもう一つ別の声に変わりました。顔を上
げると、ザラザラしたドアのガラスに二つの人の影がうつってい
ます。

もう一つの声は管理者さんの声だとすぐわかりました。たまに
しか来ないし、来ても二階の事務所にいるので声をきくことはめ
ったになくても、耳のよい私にはわかりました。

声は二つとも、今度は雨もりみたいに天井からポタポタ落ちてきたので、私はイスから立って、しみみたいに床にはりついた文字をしつかり見落とさないように書き写しました。

だんだん寒くなってきた、そろそろガスストーブを出そうかと職員さんが言っています。毎年二つ出すのですが、今年は一階のいいかもしれないと言っています。なかまの数がへって一階の作業場は奥にしきりを立ててせまくしてあるからだそうです。

作業ちゅうも、いつもはガヤガヤうるさかったのに、なんだかとでもションとしてるときが多くなりました。これはとくににぎやかだった池谷さんや近藤君がよその作業所へうつたためでもありません。

ですからなかまどうしのしゃべってることを書き写すことも前より少なくなりました。それに職員さんも毎日がう顔の知らない人が来たり、その人も朝来て昼に帰ったり、朝来ないで昼から来たり、いつのまにか来なくなったりで、あまりみんなのほうから、

「前にこんなことがあったね」

とかお話できる人もいなくなりました。

そういえば今年は春の遠足もなかったですし、夏は二時の冷たいお茶の時間とたまに桐山さんからアイスのさしいれがありました。もうストーブを出すのだから、どうも秋まつりはなさそうです。

なかまどうしのしゃべってることを書き写すことも前より少なくなりましたので、アンデルセンもたまに復活しますが、おもにCDやCDにあきたときは静かすぎてさびしいのでつけることにしたラジオをきいて、字をひろっています。

CDのほうは同じものを何回もきいてるので、かんとんに文字は出てきますし、ラジオもゆっくりした声のときは出てきます。

あとは管理者さんと桐山さん、事務員の古池さん、それに名前のよく知らない職員さんが二階の事務所でしゃべってる声を写すくらいですが、これは桐山さんの声は大きいのでよく字を拾えるのですが、ほかの人はだいたいヒソヒソしゃべってるので、耳のいい私でもなかなかむずかしいです。

それに、「こうてつ」や「きゆうしゅうがっぺい」「ぜいむかちんさ」「ぎょうせいしどう」など聞いたこともない言葉が多くて、

ちゃんと聞きとれているか不安なのです。まあいろいろ変わったことはありますが、私はじぶんの仕事をがんばってあげたいのです。それに早口の声でもだんだん出て

くる文字が追いついてきましたし、漢字もちよつとずつ増えてきたから上達しているのです。

もう十二月ですから、秋まつりはやっぱりありませんでした。クリスマス会はやるといううわさですが、でもいつもならそろそろクリスマスツリーを出してみんなでかざりつけるのに、今年はまだ出ていません。職員さんに言っても、その職員さんがめつたに会えないので、つぎに会ったときはもう忘れてるみたいです。そういえば管理者さんにもさいきんずっと会ってません。これもうわさですが、「出張」でどこか外国に行ってるみたいです。そのうわさは桐山さんからきいたのですが、それをうわさしてるとき桐山さんはいつも怒るときみたいなどなるような声で、それなのにニヤニヤ笑いながら言ってたのですから、何か変な感じでした。

ちょうどクリスマス会の日には管理者さんは出張から帰ってきました。クリスマス会はなかまや職員だけでなく、なかまのお母さんも来るいちばん大きなイベントです。

その日は作業はお休みで、朝からゲームなどして遊びます。ゲームはランプやオセロやジグソーパズルのほか、職員さんが手作りした射的などもいつもあったのですが、今年はありません。そのかわり、新しく買ってきた、小さな紙のお金で買い物してどんどん金持ちになっていくゲームが加わりました。

私はじぶんの仕事が好きなのでとくべつに仕事してもいいといわれましたが、買い物ゲームにきょうみがあるので、そっちをすることにしました。でもノートとえんぴつはそばに置いてあります。

みんながゲームしてる間、お母さんたちは二階でちらし寿司や唐あげなどのご飯を作っています。

いつもよりちよつとおそい十二時よりすこしあとになって、お母さんたちがお皿をもつて下りてきて、いよいよご飯です。

ちらし寿司と唐あげ以外にもエビフライやシューマイがあり、おいしかったです。

ご飯がすむと、管理者さんが下りてきて、外国のおみやげという紙につつんだ小さな四角いお菓子をみんなに一つずつ配りました。ちよつと変わった味でしたが、それもおいしかったです。

そのあとコーヒーやジュースをのんで、一時になりました。その日は特別にそうじはなしで、またゲームがはじまりました。私は朝買い物ゲームをしていたのですが、むずかしくてあまりわからなかったもので、それを横目でみながらじぶんの仕事にもどりました。

やはりこのほうがずっと落ちつきますし、それにお母さんたちもほめてくれるのでウキウキしてきます。

二時には管理者さんとお母さんの代表者さんからあいさつがあり、そのあとみんなでクリスマスの歌を歌ったりして、三時になつてそろそろおしまいです。職員さんやお母さんの片づけをなかまたちも手伝います。

片づけもおわり、みんなはトイレに行つて帰るしたくをし、お母さんと帰る子は先に帰りました。送迎車の子もそろそろ帰るころだなあと思つていたら、表の戸がバンと大きな音で開きました。びっくりしてみんなそつちを見ました。桐山さんがいました。

「あいついるのかよ？」

と桐山さんは大きな声でいいました。あいつとは管理者さんのことです。桐山さんとだいたい同じ年ぐらいのおじさんなので、たまにそうよぶのです。

職員さんはいというのと、桐山さんはいいつもみたいには上ばきにはきかえないで、ドカドカ音を立てて階段をのぼり二階に行きました。

桐山さんと管理者さんの声はどちらも早口でしたが大声でしたので、ポンポン文字はとび出しました。あわててノートとえんぴつをとりに行つて書きとりました。

それから桐山さんが下りてきて、あとからくつつくように管理者さんも下りてきました。二人で階段のうえで大声を出しながらじゃれあつてる感じです。

それから桐山さんが管理者さんのネクタイをグツと引っぱると、背の高い管理者さんは背中を丸め背は小さくなりました。管理者さんの顔がどんどんまっ赤になつてきました。

それから管理者さんが桐山さんの背中をドンと押すと、二人で四本足の一人みたいにいっしょくたにドドドドのものすごい早さで階段を下りてきます。

下までつくとそのいきおいで二人ともこけそうになりますが、ドスンとカベにぶつかつてなんとかセーフです。

あいかわらず大声でどなりながら桐山さんは作業場をななめにとおり、だんだん近づいてきます。管理者さんも負けないくらい大声です。びっくりして泣いている女の子もいます。

「うるさい、泣くな！」

桐山さんがいったので、さつそく書きとめました。

顔を上げると、桐山さんが立っていました。色のついたメガネで目はみえませんが、口は笑っています。

「お前、さつきから何書いてる？」

桐山さんがいいましたが、これは小さなやさしい感じの声です。

「はい、私は耳がいいので、きいたことばが目に見えるのです」
桐山さんが私のイスをドンとけたので、イスはグラツとゆれてそのままたおれ、私もノートを持ったままたおれました。

管理者さんの声がしたので、床の上で寝ころんだまま書こうとしました。きゆうに何か固いものが頭のよこにささり、目のまえがまっ黒になりました。そのため管理者さんの声はまっ白な字になつてうかびました。それで私はまっ黒なノートにまっ白な字で、「ぎゃくたいだぞ」

と書きました。
それからまた固いものが鼻にぶつかり、ポタポタ赤いものがノートの上に落ちてきました。

今年のお正月休みもずっとホームですごしました。今年はとても長い休みだったのでさいごのほうはたいくつでした。

わかたけ作業所に行く今年さいしょの日も、去年のようにとうとう待ちに待った、という気はしませんでした。

なぜなら、管理者さんの言いつけで、ノートを使った仕事はしばらくお休みするようにいわれたからです。

なんでも、もし仕事をはじめたら、桐山さんのことで、ああ桐山さんはあの日でいなくなつたのですが、私が「シヨック」を思い出すから、ということですが、よくわかりません。

そうじゃなくて、たぶん私がノートに書いていた中身のせいだと、私にはわかっていきます。

なぜなら、あの日のおつぎの日、私のノートをめくってじっくり読んでいた管理者さんがだんだんこわい顔になって、急にパタンと閉じ、

「これもとうぶんあずかっておくね」

と、二階に持って行ってしまつたからです。

そういえば今年になって管理者さんとはまだ会っていません。

私は二階に上がったことがないので、これはお昼の時みそ汁を温めたりごはんの準備を手伝い上がった子から聞いた話ですが、管理者さんが座っていた机には市役所から来た知らない人が座っていて、管理者さんの机の上や引き出しの中を整理整頓しているそうです。おかげでいろんな紙や封筒がタワーになつてくずれそうだった机の上はすっかりキレイに片づいたそうです。そういえば毎日いろんな人がぎゆうぎゆうに詰まつた紙袋を持って二階から下りてきては玄関を出たり入ったりします。

なかまはまた何人かへりました。これもうわさですが、もうすぐここはなくなつて、みんなべつべつの作業所にうつるのだそう

です。じっさいにもう次のところが決まったといってる子もいます。私はまだ決まりませんが、今探しちゆうだそうです。

仕事のほうは、ホームの職員さんや世話人さんは、「アンデルセンだけ、また始めたら？」

といってくれますが、またよくない事になったら困るので、また始めたいのですがどうしようか迷っています。

私は耳がいいのですが、聞いた言葉は今でも字になってハツとあらわれますが、それでも前よりはずいぶんへりました。

それでも今でもときどき文字は出てきて、フワフワうかんで、そのうちポトツと落ちたりゆっくり下りていたりします。

ですから床の上には書けないまま置きっぱなしになった字が何個もころがっています。

だんだん線が細くなってグニャツと曲がり、それはホームで世話人さんが忘れていて冷蔵庫の奥でみつかる野菜やハムみたいに、見るだけでカチカチに固そうです。

作業所がなくなってしまうか、私がいなくなる前に、なんとかしなくてはけません。それはほんとに固そうなので、手でつかめる気がして、たまにしゃがんで顔を近づけ、手をのばします。

それで指のあいだにはさもうとするのですが、もうすっかりひねくれて何だかわからなくなりました。文字はスーッと指をとおりぬけて、やっぱりずつとそこにいたままです。

(引用文献)

青空文庫より

『赤いくつ』楠山正雄訳

『人魚の姫』『みにくいアヒルの子』『お墓の中の坊や』矢崎源

九郎訳

『おやゆび姫』大久保ゆう訳